

現代に伝わる武士の世の技

寛永20年（1643年）に入府した二本松藩初代藩主丹羽光重公が城の大改築を行った際、城館を建築するかたわらで、大工職人が城内の建具・調度品なども手掛けたことが二本松家具の始まりと言われています。

受け継がれた、伝統の技による二本松の家具。

古いものの「良さ」が見直され、丁寧な修繕や高度な技術により再生する家具。

造る技術、生かす技術。

二本松には、技術をつなぐ職人がいます。





伝統の技術を引き受ける

二本松木工家具
協同組合〔表〕

すげの みつとし
菅野 三壽 さん(83)
えんどう けん
遠藤 健 さん(30)

昭和21年、県内で初めて、男子が学ぶことの出来る県立の補導所現在のテクノアカデミーが「二本松木工補導所」として、若宮地区に開校しました。

のちに、表地区へ移転し、塗装科もつくられ、中学校を卒業した若者が1年間、家具造りや塗装の技術を学び、市内、県内外へと就職していききました。

塗装科では木工以外の塗装技術も学ぶことができ、建築塗装や自動車鈹金などの分野でも多くの卒業生が二本松で活躍しています。

この二本松木工補導所は、職業訓練所、職業訓練校と名称を変え、家具造りを担う人材も多く輩出しました。

しかし、社会情勢の変化や入校生の減少などで、昭和57年3月に閉校。

その技術は、当時の塗装の授業のための実習棟を活用し、市内の事業者が協同で運営する「二本松木工家具協同組合」に継承されています。組合では、各店舗からの依頼を受け、専門の塗装職人が、伝統家具の塗装を行います。

17歳の頃から塗装を学び、60年以上ものキャリアを誇る菅野さんから技術を学ぶのは遠藤さん。塗装職人への道を歩み始めてから8年。丁寧な仕事が認められ、一人で家具の塗装を任されるようになっていきます。



- 1・2_着色の工程。丁寧に色を着けていく。
- 3_丁寧に養生された階段筆箱。仕上げ塗装の直前の状態。
- 4・5_仕上げの塗装。最後に吹き付けを行い、二本松伝統「階段筆箱」の側面が鏡のように綺麗な光沢に輝く。
- 6_菅野さん(左)と遠藤さん(右)。



6

たす
簞笥や家具の塗装の一般的な
作業工程は、

木地調整（塗装の下準備、ペー
パーやすり）

↓着色

↓養生（紙貼り）

↓目止め（塗料を塗る）

↓下塗り

↓ペーパーやすり

↓中塗り

↓ペーパーやすり

↓仕上げ塗装

お客様の期待に応えるため、
丁寧な色の調整をし、何度も確
認をします。

遠藤さんに塗装のやりがいについて話を聞くと「塗装の最後の仕上げ前に色を掛けます。同じ木でも、木によって、少し白かったり、色が違うものがあります。上手く均一に塗れた時に『やったな！』と思えるようになってました」とのこと。

菅野さんについては、「塗りがめっちゃくちゃ上手くて、知らない技術がいっぱい」と話してくれました。

菅野さんによると「木は同じ種類でも、年代によって塗料の吸い方が違います。実は、厚化粧しないのが一番良い」とのこと。

印象に残っている塗装について話を聞くと、「国や県のコンクールに出す家具を塗る時は、緊張しました。また、何より自分が悩むくらいの仕事があれば『おもしろい』とのこと。

菅野さんに、遠藤さんについて伺うと「孫みたいで話が合わないけど、こちらが言ったことは分かってくれています。おとなしすぎるくらいですが、こちらを見て、自分で覚えてくれます。」と優しい笑顔で話してくれました。

菅野さん自身も「基本は習いましたけど、あとは、他人の技術を盗んできた」そうで、「言われたまま聞いているようではダメ。『オレだったら、こういう風にしたい』と思って人の話を聞くと、上達していきますよ。」と教えてくれました。



1



2



4



3



5



6

- 1_伝統の階段筆筒の引き戸を作る本田さん。
- 2_「城家筆筒」の「松」と「菊」の金物。
- 3_栓の木を使用した伝統的なホゾ組。
- 4_筆筒の引き出しに金物を取り付ける菅野さん。
- 5_伝統的な階段筆筒。鈴木社長が持つ引き戸は、板の面と楮の皮の入った上川崎和紙の面とのリバーシブルになっている。
- 6_鉋の手入れ。職人の皆さんが使用する道具は丁寧に扱われ、作業後は整理整頓されている。

(有)鈴木木工所(竹田)

こばやし えいじ
小林英治さん(67)

ほんだ しんいち
本田真一さん(54)

かん の りょうへい
菅野良平さん(31)

明治24年創業。初代は宮大工をしており、雨の日でも出来る仕事として、筆筒造りを始めたそうで、社長の鈴木文子さん(82)は4代目。

二本松伝統家具とは、福島県の伝統的工芸品に指定され、鈴木木工所には、特徴的な形の「階段筆筒」や、二本松の「松」と「菊」を金物にデザインした「城家筆筒」の注文が数多く入ります。

筆筒造りは、設計

- ↓材料の選択
- ↓木の長さを揃える木取り
- ↓筆筒の大きさに合わせて木材をつなぎ合わせる
- ↓ホゾ組の切り込みを入れたりする加工
- ↓組み立て
- ↓引き出し、扉の作製
- ↓本体仕上げ

うろし
↓漆塗り

↓金具の取り付け

↓仕上げ

と数多くの段階を踏んでいきます。

設計やお客様との打ち合わせは、鈴木社長が担当。「毎日、家具を使い、家具と顔を合わせるの女性が多いので、色や使い方の相談は、女性同士の方が良く分かります。」と話してくれます。

そして、職人の皆さんが手掛ける伝統の家具。「桐」や「欒」、「栓」、「杉」などの木材をふんだんに用い、手作りで丹念に仕上げられます。また、注文で大きさや色合いが自由に変えられるのも二本松家具の特徴です。

二本松の多くの家具屋では、「職人による一品造り」で家具を造ります。材料の選択から仕上げまでを一貫して一人の職人が携わります。

職人の技術が製品の仕上がりやダイレクトに伝わるため、常に緊張感を持って家具造りに向き合い、ますます技術が向上していきます。



- 1_漆塗りの箆笥にオリジナルの金具を打つ武藤さん。
- 2_昔は箆笥の裏に贈り主や職人の名を刻んでいた。(写真は明治時代のもの)
- 3_豪華な明治時代の金物を復刻。
- 4_伝統の箆笥と田中社長。
- 5_郡山市から来店された菅田さん夫妻。50年前に田中家具で購入した箆笥やドレッサーを嫁入り道具として父親に持たせてもらい、今でも大切に使っているそう。
- 6_置ただけでスマホの充電が出来るお洒落なサイドテーブル。



田中家具(株)【郭内】

工場長

武藤 祥平さん(66)

明治2年創業。当時から同じ

場所に店を構えます。明治時代から箆笥のほかに椅子やテーブル、こたつ、ベッドと生活に関わる家具を手掛けていました。

こちらで家具造りを手掛けているのは、大ベテランの武藤さん。子どもの頃から図画工作が大好きだったそうで、大人になり家具造りの道へ。そして、家具職人として50年、田中家具では40年腕をふるっています。

「上手く出来上がればうれいんです。ただ、毎回、同じようにはいきません。50年経ってもなかなか上手いかないことも多いです。本当に満足がいったのは、何回かですかね。」と話してくれました。

最も印象深かった仕事は「大物の箆笥」とのこと。櫨の無垢材をふんだんに使用したもので、数百万円もの値段がついたそうです。

会社を任されているのは田中康生さん(45)。洗練されたシヨールームに多くの家具が並べられています。また、東京などのデパートでの販売も多く手掛けています。

「お客様の求める家具も変化している」と話してくれます。

震災後、家具の転倒を気にする方も多く、箆笥は背の低い箆笥へ需要がシフトしているそうです。

また、洋室やリビングに飾れるようなオシャレな色の箆笥は人気が高く、インテリアとして購入するお客様も多いとのこと。家具の色も、油性漆を用いることで色彩の自由度が増し、鮮やかなグリーンやイエローを出すことも出来るそうです。

ほかにも、置くだけでスマホの充電が出来るサイドテーブルなど、時代が求める新たなコンセプトの家具も生み出しています。

どの家具も、職人が手掛ける一品造り。色やサイズ、形、全てお客様の好みに合わせて造られます。

【株】たてぐ屋山岡【長命】

やまおか まさと

山岡 正人さん(73)

やまおか あきこ

山岡 明子さん(32)

日本の名工として認められた故山岡六郎さんが姫小松(杉田)に店を開き、のちに長命へ移転。現在は、六郎さんの子で二代目の正人さんと、正人さんの子で三代目の明子さんがともに支えています。

最近では、和室が減り、建具のメインである障子やふすまの需要も減少してはいますが、

建具以外にも、建築工事や木工事、サッシ工事も手掛け、「建具自体は必要なもの。工事がゼロになることはありません。」と正人さんは語ってくれます。

昔は、100%男の世界。それは、重い仕事や危険が伴う仕事が多かったためですが、今では、ひと昔前では考えられないくらい安全性が向上しているそう、女性の職人も増えています。

たてぐ屋山岡では、三代目の明子さんをはじめ、女性が活躍。建具職人の世界でも、女性の活躍が期待されています。



- 1_職人として活躍している宗像智恵美さん。
- 2_最高級の黒柿を使用した箆笥や硯箱。滅多に出会えない自然の美しい至宝。これらは初代の六郎さんが手掛けたもの。
- 3_ 2代目の正人(右)さんと3代目の明子さん(左)。

【有】安齋木工所【小浜】

あんざい やすお

安齋 康男さん(51)

ふるかわ みな

古川 弥那さん(20)

「何十年も木と向き合い、オーラルジャンルでモノづくりをしてきた父(征治さん)は、経験の広さや深さが違う。敵わない」と話してくれたのは、小浜で木工所を営む安齋康男さん。

子どもの頃、学校から帰ると工場に行つて、先々代のおじいちゃんや職人の皆さんに遊んでもらっていたといいます。



- 1_卓上帯鋸を上手に扱う古川さん。
- 2_ 8尺(約240cm) 3尺(約90cm)の大きな樺のテーブル。
- 3_安齋さん(右)は、古川さん(左)の仕事ぶりに「素直な気持ちで取り組んでいます。」と、優しい笑顔で話してくれる。

今では、多くの職人さんとともに木工所を切り盛りし、超一流と言われる豪華ホテルや旅館、豪華客船などの家具、内装を手掛け、全国を飛び回っています。その康男さんと一緒に汗を流している職人の中で最も若い職人が古川さん。

高校時代から「目に見える、人が使うモノを作りたい」と思っていたそうで、職人さんが家具を造っているところに出会い、家具造りに魅了されました。今は職人の道を歩み始め、日々、木と向き合う時間を過ごしています。

(有)ハタケヤマ家具【竹田】

あんざい かつお
安齋 克夫さん(69)

ねもと まさあき
根本 正明さん(63)

先祖は殿様の身の回りのものを造っていたという畠山保弘さん(56)が職人さんをまとめます。学生時代は、室内空間のデザインを学び、約30年前、家業である家具造りに携わるようになりました。先代からは「何に対しても丁寧な扱ふこと」「用途に合った道具をきちんと使うこと」を教えられたと言います。

ハタケヤマ家具では、無垢材を多く扱います。製品としては、関東向けの箆笥や食器棚を主に手掛けています。

古い箆笥の修理も数多く引き受けていて、キズを修復し、木を再生し、金具はサンドブラストで蘇らせます。この箆笥の修理には、古い箆笥を熟知している、安齋さん、根本さんらベテランの職人が当たります。

保弘さんは「昔ながらの技術を継承しながら、家具だけにこだわらず、木工に関する新しいことをやっていきたい」と今後の抱負を語ってくれました。



- 1_古い箆笥の修理を手掛ける安齋さん。
- 2_洗練された技術で鉋を掛ける根本さん。
- 3_自作のキャンピングカーの居室部分。保弘さんの趣味でもある釣りや災害時の避難スペースとしても活用可能。
- 4_木を組み込んでいる特徴的な引き出しの取っ手。

二本松の家具造りの技術には、素晴らしいものがあります。市内に職業訓練校があった頃は、県内のみならず、東京からも「何とかこっちに来てくれ」と言われるほど、二本松で学んだ職人は人気がありました。当時、職業訓練校生が技術を競う全国大会が開催されており、二本松から、ほとんど毎年入賞者を輩出していました。中には、卒業後、スペインで行われた技能五輪で世界第3位となった者もいました。

今でも、職業訓練校で学んだ職人が市内で数多く活躍していることを嬉しく思います。

私の希望としては、今後も家具の産地として発展してもらいたいです。如何せん販路が狭くなっているように思います。大きな量販店が出来て、以前のような「作れば売れる時代」ではなくなっています。

家を建てる時には造り付けが多く、昔とは、生活様式が変わっています。時代が変われば、それに合わせていかなければなりません。

もし、需要が減り量産をしなくなると、二本松は『産地』と言えなくなってしまう。家具、木工に携わるみんなが一丸となって、一大消費地に売り込んでいけば、また、新たな販路の開拓も出来ると思います。



元職業訓練校専門教務主任
さいとう ただお
齋藤 只夫さん(86)

旧飯野町出身。子どもの頃に父親と一緒に荷車を引いて、竹田坂に箆笥を買いに来た事が思い出。

二本松職業訓練校(木工科)では、職人を目指す若者を指導し、現在は、二本松市で生活を送る。



多くの家具屋が軒を連ねる
「家具の街 竹田坂」